

4 VOL.

高校生 未来 サミット



高校生未来サミットは今年で4回目を迎えました。第1回目となった2019年は、1泊2日という短い行程に関わらずすぐに高校生同士が打ち解けディスカッションが実現しました。「なんで2泊3日じゃないんですか?、もっと長くしてほしい」という声に「大人の事情でごめん」と返答していました。予想以上に初年度から私たちが考えていた「高校生ならではの目線で未来を考えてほしい」というテーマを実現してくれました。そして大人たちの予想を毎回いい意味で裏切ってくれることも大きな楽しみの1つです。回を重ねるごとに私たちの意識も変化し、周りのサポーターも徐々に増えてきたという実感があります。

今回の皆さんはこの研修場所でも積極的に参加し、みんなが1人ひとり存在感があり、個性を出して発言し、毎回その発言が面白い。今回は荒天のため急遽、飛行機の時間が早まることになりました。短いディスカッションの中でやはり個人的な意見と未来へのビジョンを語ってくれたことが何よりうれしいことです。今回の旅の行程を振り返り本誌にまとめました。この大きな出会いをくれた皆さんに感謝!

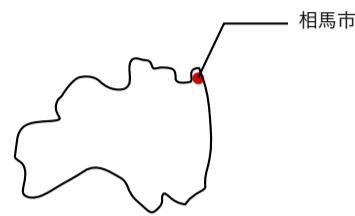
来年度、2023年もまた新しい高校生同士の交流が生まれることを楽しみにしています。皆さんに会えることを楽しみにしています!

DAY1 9/17 震災を僕らの目で確かめに。

- 7:45 伊丹空港集合
- 8:40 福島駅西口出発
- 9:00 伊丹空港出発
- 10:25 仙台空港着
- 10:45 仙台空港出発
- 仙台空港～新地 IC
- 11:30 玄米の全袋検査見学 (相馬市野馬土)
- 12:00 昼食 (カフェ野馬土)
- 12:40 出発相馬IC～浪江IC
- 13:40 請戸小学校視察
- 14:30 出発
- 15:00 大熊町
- バスの中から見学
- 15:30 浪江町道の駅休憩
- 17:30 土湯温泉
- YUMORI 到着
- 18:00 夕食準備・夕食
- 19:00 映画鑑賞・入浴・グループワーク・自由時間

1日目となる9月17日。仙台空港からバスで相馬市へ。報道で伝え聞く遠い被災地福島で、震災・原発事故から11年経過した被災地を知る未来サミット初日。そこに住む人々の生活や思いを受け取り、未来に何を伝え活かせるかを考えたい。

農家自ら、全部調べる。 浜通り農産物供給センター (相馬市・野馬土)



仙台空港からバスで40分程度南下し、福島県相馬市の浜通り農産物供給センターで原発事故翌年から続く玄米の放射能検査場を見学した。この事務所は震災後、避難区域となった南相馬市小高区から移転してきており、国内外からの支援を受け、今では自立して運営されている。すぐ近くの相馬港の民間米倉庫に数千袋保管していた玄米が地震直後の津波で流されるなど、何重にも苦難を乗り越えた農家の視点であり、被災地視察ツアーなどを運営する復興の重要な場

所となっている。

玄米の全袋検査は、原発事故翌年から始まり、福島県で栽培される全ての米を検査してきた。検査結果は米袋に貼られたバーコードで確認でき、福島県産米の安全性の担保となっている。数年前からは原発周辺の12市町村が全袋検査を継続し、それ以外の福島県内の自治体は、旧市町村単位で放射能検査を実施し、県内全域で基準値以下(ほとんどが検出限界以下)となっている。高校生未来サミットでは毎回の検査場所を見学してもらっている。福島県の農業粗生産額は原発事故以前に回復していない。「風評被害」があるからと言われているが、この被害は原発事故が起きたことによる「実害」である。風評被害では「根も葉もない」ことにより食べる人と作る人を分断することにつながり、本当の責任を見えづらくする。つらいことだが原発事故により、放射性物質は農地を汚染した。福島県の農産物を好きだった人にとっても、福島県産を選ばなくなったことも大きな被害である。この事故を起こした東京電力と



原発を推進した政府にこそ責任があり、それを曖昧にする言葉が風評被害である。

「検査したから大丈夫です」と言わなければならない農家の気持ちを知ってほしい。原発事故がひとたび起きれば途方もない被害が長年にわたって続くことも。それでもそこで米を作り、うちの野菜は美味しいよと農家は元気になってきた。「被災者では終わらない」覚悟と未来への希望を失っていない農家が高校生たちを迎えた。



玄米の放射能測定器



カフェ野馬土テラスでランチ



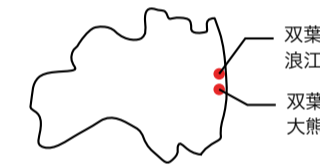
検査結果はQRコードで辿ることができる



玄米全袋検査器のシステムを学ぶ



11年前の浜通りを襲った津波の爪あとを見る。



震災遺構となった請戸小学校で防災を考える

請戸小学校のある浪江町は、福島県浜通り(沿岸部)の北部に位置し、双葉郡に属している。浪江町は、海、山、川に囲まれ、豊かな自然を誇り、大堀相馬焼やなみえ焼そばといった名産品でも有名。請戸小学校がある請戸地区は、東日本大震災で154人が津波の犠牲となり、その後災害危険区域に指定され、現在は人が住めない地域になっている。しかし請戸地区以外の一



津波の高さを実感

部の地域では避難指示が解除され、居住ができるようになるなど、復興に向けた取り組みが進められている。

震災の記憶を後世に伝えるべく、2021年10月から福島県初の震災遺構として請戸小学校は開館した。当時、津波に襲われ、校舎の2階まで浸水したが、校内にいた児童と教員は学校から約2km離れた場所にあった標高40mほどの大平山に避難したことで、奇跡的に全員無事だった。

請戸小学校の入り口から中に進むと、震災前の浪江町の暮らしを伝える写真、震災時の状況が記されているボードが展示されている。絵本「請戸小学校物語 大平山をこえて」のページをパネルにしたものも。「被災した人々はどういう状況にあってどう対応したか、起きた事実をシンプルに伝えたい。」とは絵本を



作った団体の方の話。「災害はいつなんどき、誰にでも起こり得ることなので、参加した皆さんの身に置き換えていただいで、普段から防災の備えをしておくことが大切だと思います。」

大熊町の復興は「小さな拠点」から広がっていった。

請戸小学校を後にし、原発立地地域である大熊町へ。大熊町は福島第一原発事故により町内全域に避難指示が出され、町民の多くが今も県外で避難生活を

送っている。町役場や駅などを含む町中心部は厳しく立ち入りが制限される「期間困難区域」となったため、町内の放射線量が低い、もともと田畑だったところを整備し、新しく役場庁舎や町民の住居などが集まる小さなまち「復興拠点」が作られた。そこを拠点に、少しずつ生活の場を広げていき、平成31年4月

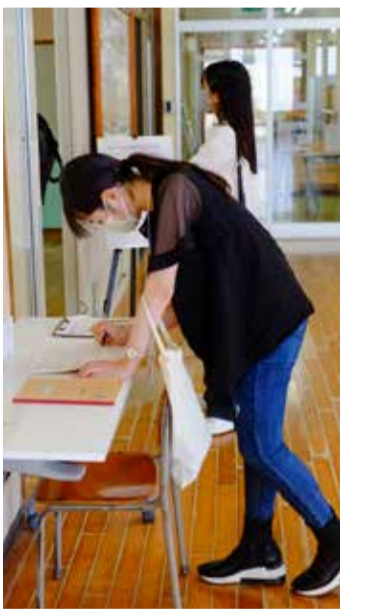
自然の力を目のあたりに



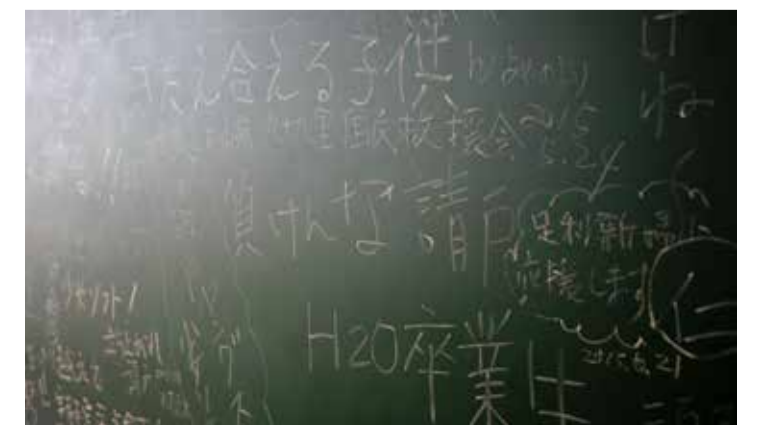
に一部の避難指示が解除され町内への帰還が始まっている。令和4年6月には「帰還困難区域」のうち「特定復興再生拠点区域」の避難指示が解除され、約11年ぶりに町の中心部であった区域に立ち入ることができるようになった。

しかし、特定復興再生拠点までの地域は、主要道路からわき道にそれることができないように鉄のバリケードが設置され、民家への入り口もバリケードが設置されているという状況が続いている。私たちはバスの中から、住宅がツタに絡まれ、のみこまれていく様子を目の当たりにした。

震災から11年たった今、東日本大震災や原発事故のことを



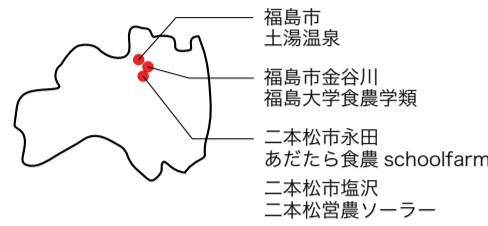
ノートに想いを残す



黒板には訪れた人たちのメッセージが

DAY2 9/18 未来の畑の景色を探しに。

- 8:40 土湯温泉 YUMORI 出発
- 8:55 小水力発電視察
- 9:30 二本松市 アグロエコロジー農園体験
- 11:00 ソーラーシェアリング視察
- 12:00 福島大学着附属農場見学
- 12:30 昼食 (福島大学)
- 13:30 大学施設見学
- 16:00 福島大学出発
- 19:00 ワークショップ意見の共有とまとめ



土湯温泉の小水力発電、二本松市の有機栽培・不耕起有機栽培の試験圃場のあだたら食農schoolfarm、太陽光発電の下でシャインマスカットや大豆栽培に取り組む営農型太陽光発電所、福島大学食農学類の教授陣から研究施設視察と盛りだくさんの学び。新しい取り組みで未来を切り拓く挑戦者たち。誰からも奪うことなく、食・農・エネルギーを生み出す生業は、これからの生きる高校生たちに引き継がれ、さらに発展していくだろう。

「食べるを学ぶ」農業の学校。あだたら食農schoolfarm

福島県の中央北部に位置する二本松市。市内永田地区にある「あだたら食農 schoolfarm」は耕作放棄地を活用し、二本松の有機農業や不耕起栽培などを学ぶことができる。身近な農地で誰でも実践できる不耕起栽培やオーガニックガーデンの維持を、参加者が工夫しながら開発する「参加型実証農場」だ。

あだたら食農schoolfarmの3つの指針

- 1.アグロエコロジー 自然の力を最大限活用し、省コストで安全な生産を目標とする。また、農業を問わず、持続可能な農業を実践。
- 2.耕作放棄地の活用 近くの耕作放棄地をなんとかしたい、という人は多い。無理なく管理できる範囲で耕作放棄地を農地に変えられるとしたら。農業や化学肥料を使わず、農業機械を使わずに安全な食を自分たちで確保できるのなら、新たな農の担い手はこれから増えると確信している。

3.消費者との連携 消費者はどんな食事をするかによって、農業の方向さえ変える選択権を持っています。農家も同時に消費者、農業生産と食の消費との距離を縮めていく事ができる。

現在の農業の状況は農家の危機だけではなく、食べる人の危機でもあり、自分の食を自分で作る「国民皆百姓」で、みんなで作るのが良いと思いませんか？農場は、土を耕す「耕起区」と土を耕さない「不耕起区」、そして「オーガニックガーデン」の3つの区域に分かれている。また、慣行

栽培、有機栽培、不耕起栽培とさまざまな方法を試みているが、正解はないので試すしかない。栽培した野菜などは分析したり、実際に食べ比べたりして、それぞれのメリットとデメリットなどを参加者が実感し、話し合ったり、学んだり、楽しむことができる場所となっている。当初の計画では、参加者の皆さんに夕食のカレーやサラダの材料となる野菜をそれぞれ収穫してもらおうと考えていたが、あいにく端境期となってしまう、残念ながらそれは実現できなかった。しかし、耕起区と不耕起区の大工さんが栽培したスイカをごちそうになったりと見学だけではない体験ができた。原発事故という人類史的惨禍に見舞われた福島県だからこそ、アグロエコロジーの魁の地であるべきと考え、未来に向けた取り組みを地域に広げて行く。

電気も畑の作物の一つ。二本松営農ソーラー

次 高校生たちが向かった先は、あだたら食農 schoolfarm からほど近い二本松塩沢の「二本松営農ソーラー株式会社」。文字通りソーラーシェアリングを行う会社として2019年にはじまった会社だ。営農組織は二本松で有機農業をしている農業者が主となり6haの土地を皆でまとめ農地を集約化。ソーラーで発電するだけでなく、作物を生産する収益をダブルで得ることで新しい農業のスタイルを実験的な取り組みも行っている。

農場を案内してくれたのは今年から農業者として働き始めた塚田晴さん。高校から有機・自然農法を実践で学んできた。塚田さん曰く、工夫次第で営農はおもしろくなると言う。「例えば」と見せてくれたのが、ソーラーシェアリングの支柱に鉄線を張り巡らせており、これ

はシャインマスカット用の鉄線だと見せてくれた。そのアイデアも面白いが、この鉄線も自分たちで施工したというから驚きだ。内情を特別に高校生たちに教えてくれた。鉄線施工の見積りを見て、800万円という予想外の金額に驚き、一時は考えを改めようと思ったらしい。鉄線の部材を自分たちで取り寄せ、一部業者の方をお願いしたが、ぶどう棚を格安で完成させることができた。総額200万円ですることができた。

さらに驚きなのが、ここで子牛の放牧も行う予定という。ソーラーの下草を飼料として子牛が食べる。動物をうまく使い畑を荒らさずに下草のメンテナンスを行うユニークなスタイル。これもアイデアと実行力の為せる技だ。農業をうまく循環させることで無駄をなくし、結果的に農業



太陽光発電の下で立派に育つ大豆



高校生のための特別講義。福島大学食農学類

福 島大学食農学類は2019年にできた新設の学部だ。我々、高校生未来サミットに参加する高校生たちを喜んで迎えてくれた。さすが、新設の学類。研究室は最新の機器が並ぶ。何を隠そう今回のチームを支えてくれたのは食農学類の大学生たち。高校生たちからしてみれば数年後の自分たちという目線もあつたに違いない。親しみもありながら尊敬もしているそんなチーム作りにも貢献してくれた。

食 農学類では食品科学、農業生産学、生産環境学、農業経営学という4つの主要なコースに別れている。さらに専門性の高い研究室に別れているが、高校生たちも興味津々。農業用水の流水を実験する機械や、食味をミクロな世界で分析する世界があることを目を丸くし



福島大学食農学類の最新の実験施設

小さなエネルギー革命。

小水力発電を見る土湯温泉

福島市の温泉どころの1つ、土湯では橋の袂に立つ大きなこけしのお出迎え。温泉と土湯こけしなどの手工芸、観光の賑わいだ、震災直後は多くの避難者を受け入れた宿泊施設と化した。しかし「若旦那」と言われる次世代後継者が街を盛り上げ、エネルギー問題も観光に帰結しようとがんばって来た。豊富な水量で発電を試み、同時に温水でエビ釣りなどの新たなお楽しみも組み合わせている。我らサミット一行はぐるりとバスで周り、温泉街を後にした。



食べるのも、もちろん学び



耕起・不耕起栽培のトマトの食べ比べ

4

VOL.

高校生 未来 サミット



まるくなつて
考えよう。
暮らしも
農業も
未来も。